



所在地 小田原市板橋 941-1

建物概要 木造瓦葺

建築面積 161,98㎡

建築年 昭和21年(1946年)

設計・施工 不明

国登録有形文化財 第14-0044号

※平成12年(2000年)9月26日登録

交通 箱根板橋駅より徒歩10分



松永安左エ門(耳庵)が戦後昭和21年(1946)、小田原の板橋に造営した邸宅です。

小田原城下の西隣板橋地区は、旧東海道沿いの平地とその北側の台地からなります。気候が温暖で相模湾を臨む眺望のよいこの台地は、山縣有朋の古稀庵、益田鈍翁の掃雲台など、政財界の重鎮が競って別邸を構えた場所でした。

松永が小田原に居を移したのは、所沢・柳瀬の寒気に耐えかねた妻一子への心遣いと、故郷の壱岐に通じる土地柄に惹かれたためともいわれています。

「老櫟荘」の名は正門前の櫟(ケヤキ)の老木に由来します。当初20坪程という母屋は極めて簡素なもので、屋根に松の枝がかかるのを見た池田成彬の案で居宅を松下亭と称し、その本玄関には「松下亭まつなが」の表札を掛け、後に母屋に繋げて増築した茶室にもこの名を用いました。手間を楽しむように、10年近くに及ぶ増改築を経て55坪程度となった居宅松下亭は、一見簡素ながら随所に耳庵好みを現す近代数寄屋建築で、自身の到達した茶の湯の理念を実践し得る建築の集大成となりました。住宅としてみても、今日で言うバリアフリー化やロフト収納の構造など、その先見の明に驚かされます。

松永は電力再編成に奮闘し、電力中央研究所や産業計画会議に足繁く通いながら、時宜に応じてお気に入りだった縁座敷の陽だまりで、茶や読書を愉しみました。

現在は建物を公開し、見学や貸室利用に供するほか、季節折々に呈茶や茶会を開催し、茶道や和の文化に親しむ空間として活用しています。

(2018年9月現在)